
ネギま！転生だと！？うっしゃあああああ！

エミヤシロウ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 転生だと！？ うう しゃあああああ！

[T₂-H]
[Z]

N
2
7
7
7
M

【作者名】

H オジロヤミ

【あらすじ】

初心者です。まだ慣れていないので、至らない事があるかもしれません
せんが、呼んでくれれば幸いです。

車に轢かれそうになつた子供を助けて死んだ、私は、榎本當麻は。薄
れ行く意識の中で、「ああ、丙でもない事」となつて、河で思つて死

を受け入れ、気がついたら何か変な所にいました。

オタクが織り成す原作ブレイク！！「俺は新世界（ネギまの世界）

の神になるーー！」

始めまして、HIIYAYASHIROUと申します。
初心者でまだ余り書き方とかにはなれていませんが、精一杯頑張りますので、感想やアドバイスやご指摘などがありましたら、ぜひとも教えてください。

名前には突っ込まないでください。これがお気に入りなもので。
多分私が書く小説は、キャラ崩壊や、口調が多少違つたりするかも知れませんが、その時は「あ、違うな」見たいな感じでスルーしてください。もし「指摘とかしてくれたら直ぐに直します。ではでは。

プロローグ（前書き）

どうも、作者のHIIYAYAです。

読んでくれたら幸いです。

本編始まります。

プロローグ

あれ？俺、何で飛んでるんだ？……ああ、そうか。車に轢かれてそうになつた子供を庇つて、変わりに轢かれたのか。

たく、柄でもねえ事しちまつた……。

ドチャ！

俺は重力に従い、地面に叩きつけられた。最早痛みも感じない。

俺が庇つた子供が俺の元に近づいてくる……たくよ。何泣いてんだよ。男だろ？そん位でメソメソしてんじゃねえヨ。

俺は血が着いていない手で、子供の頭を撫でてやる。幸い、腕の骨に以上は無かつたから普通に動いた。

だけど、もう無理だわ。手に力が入らない……子供の頭を撫でていた俺の腕は、力なくずるりと下に落ちた。

ああ、瞼が重い……そろそろ、寝ると……する……か。

いつて、俺の15年と言つ短い生涯は終わりを告げた。

完

「はれ？」

俺は何故か目を覚ました。
確か俺は車に轢かれて…………死んだ筈じ
やなかつたけ?

状況が良く分からぬ俺はとにかく立ち上がりて周りの見る事にした。

黒く 純風景 そして その光景に不似合しな幼女が土下座して
る…… 幼女が土下座？

「すいませんでしたああああああああ！」

「…………な?」

多分今の俺の顔を見れば、かなり間抜けな顔になつてゐるだろつ。
あつははははは、この子行き成り何言つてますのん?
今の僕には理解できない…………。

「わ、私のせいでの死ぬばずの無い貴方を殺してしまいました！！！
本当にすいません！謝つても許されない事は分かつていますが！す
みませんでした！」

死ぬ筈が無かつた？ははは、俺が？何この子、痛い子？

「あ、あの。貴女は一体……？」

「は、はわわーしゅみま……すみません！私は貴方方の世界で言つ
神様です！」

「今噉んだよな。しかもはわわって……はわわ軍師ですか？
それに、神様つて……マジで言つてるのかな」の子は？

「し、信じてください！……私は本当に神様です！」

「はいはい。分かった分かった。んで？その神様（自称）が、俺に
何の用ですか？」

「自称じゃないです！私は正真正銘の神様です！」

「はいはい。それで何の用ですか？」

「実はですね。お詫びに、貴方をある世界に転生させようと迷つて
いるのですが……何処が良いですか？」

「転生……だと？……あれか、アニメとかの世界に行けるあの

転生か？

「マジデスカ！？」

「マジです！だから、何処が良いですか？」

……やはり……。

「ネギまーで、お願ひします！…」

「分かりました。では、貴方に能力を授けます。何か要望があれば、8つ位まで叶えます」

「8つも…？んじゃあんじゃあ。無限の剣製アソシエイト・アソシエイト・ワーク・ゲスト・本ジロソと王の財宝トーカーが欲しい。後、魔力と氣は最高ランクな。それから、投影も使いたいし、答えアンサーを出す者と真祖の吸血鬼と平成ライダー全部になりたい。後は相手の技を見ただけで使える魔眼が欲しい。それだけで良い」

「また何とも……分かりました。では、始めます」

神様が何か唱え始めた途端、俺の体が光り始めた。

力がみなぎつてきたああああああああああああああ！！

数分後、俺の体の光が止んだ……すげえ、力があるのが分かる。

「これで力を授ける儀式は終わりました。それでは、楽しい転生ライフをお楽しみください。何か御用がある時は、私が出向きますので、では」

そう言つと、俺の足元に穴が開き、俺は落ちた。

「きいいいいやああああああああああ！」

いつてきまあああああああす！

プロローグ（後書き）

つ、疲れました。

やはり難しいですね。

次はオリキャラの設定を書ききます。

では。

オリキャラ設定

えのもとといま
榎本当麻

年齢：15歳

身長：168cm

好きなもの・漫画、アニメ、ゲーム、カッコイイやつ（上條さんとかアーチャーとかが主）

嫌いなもの・独断と偏見で物事を決め付ける奴、虫

これは転生前の当麻のプロフィール？です。まあ、すんごいアバウトに書いていますが、それはお許しください。次は転生後の設定を書きます。

えのもとといま
榎本当麻

年齢：同じ

身長・同じ

魔力・氣・EX

能力：アンリミテッドアーマードクスケート オペビロン無限の剣製、王の財宝、魔眼、不老不死、全平成ライダーの変身。

種族：吸血鬼。

好きなもの・同じ エヴァンジェリン、茶々丸、ザジ、タ映。

嫌いなもの・同じ

はい、これが転生後の当麻の設定です。では、これにて。

やつてきましたネギまの世界！

おっす、俺、榎本当麻だ！

俺、今ネギまの世界に転生したんだ。だけどね、行き成りピンチな
の。

へ？何でかつて。それはね……俺の目の前に。

「獲物発見！」

「」いや息の良さそうな人間じゃの

俺の目の前に鬼が居ます。つか刹那と龍宮はびしつたよー？何で
居ない！？

ちい、行き成り戦わないといけないのかよ。……まあ、丁度良い機
会だ。それでは実験を開始しよう。俺の力、試させてもらおうか。

「トレスオン
投影開始」

俺は自分の剣の丘に刺さつているある一本の剣を投影する。その名は……。

「鬼切丸……さて、俺は剣術なんてからつきし何でね。スピードと手数で勝負させてもらひづぜーー！」

俺は脚に魔力を流し、地面を蹴り瞬動を使い、鬼を切つていく。

先ずは一体。

「むおー!? それは鬼の天敵やないか!? なんつう物もつとるんやーー！」

「無駄口叩いてる暇は無いぞ?」

再び瞬動を使い、鬼達に見切られないスピードで切り刻んでいく。

一、二。

残り一七体。流石に俺の創造では一~三体が限度か。もう少し投影に慣れておかないとヤバいな。すぐに綻びが出来てしまつ。

だが。

「まだまだいぐぜええええ！」

関係ナッジング！―壊れるまで使つたやうあ―！

「調子に乗るな若造が！！」

「やつべ！？ am the bone of my sword
熾天覆う七つの円環！」

俺は手にあつた剣を瞬時に解除・償還し、アイアスを償還した。

「ぬお！」

強！－！ヒビも一切入らずに、鬼を吹き飛ばした！

「投影開始」 トレース オン

俺は再び鬼切丸を投影し、鬼達を斬滅していく。

「数分後」。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、……つ、疲れた……」

何とか鬼を全て倒した。やべ、今後の課題は力を使いこなす事より先に、スタミナだな。どんなに強大な魔力や兵装を有していても。体力が無ければ意味が無い。宝の持ち腐れだ。

「さて、何処か野宿出来る所を探そう」

俺は疲れている体に鞭を打ち、立ち上がる。

その時。

キュン!!

俺の頬を何かが掠つた。つうか今の音、銃声じゃね?そして、今掠つたのって銃弾じゃね?まさか、たつみーか!?

「動くな。動いたら容赦なく撃つ」

しょうがないので俺は素直に手を上げて動くのを止める。

「ほお。以外に素直じゃないか。それじゃあ、こいつを向いて、顔を見せてもらおうか

俺は後ろを向き、顔を見せる。

「ふむ。どうやら普通の魔法使いの様だ……だけど。この学園には結界が張られていた筈だ。その結界を避けて通れる筈も無い……一体どうこう事だ？」

「……話しても良いが。どうせ君は雇われた身らしく……。ならば、君の雇い主と同伴なら構わない。私としては、そいつの方がよりこの現状を詳しく説明してくれる人が多いので助かる」

俺は学園に何とか潜入しようと考えてたから、帰つて好都合だ。

「…………しょうがない。じゃあ、行くとしようか」

やつらつと龍宮はホルスターに拳銃をしまい込み、後ろを向く。

「へへ。やつもの台詞をそのまま返せ。以外に素直なんだな」

「ふつ。褒め言葉として受け取つておくよ」

俺と龍宮は静かに学園に向かつていへ。

.....。

「ふおつふおつふお。君が龍宮君が連れてきた、客人かな？」

「まあ、そうなるな。それで、私があの場所……つまり、この学園に入つた事についてだつたな……」

「ふおつふお。最近の若者はせつかちじやのお。まあ、君が話したいのなら止めはしないが」

「へへ。このぬらりひょんめ。そう良いながら警戒心丸出しじゃないか。それは、私に恐れをなしていると取るが、良いのか？」

「バレておつたか。では、解くとするかの。無駄な争いを避けたいのは、どうやらワシだけじゃない様じやし」

俺は龍宮に連れられて、すぐに学園長室に連れてこられた。

「この人が私の雇い主だ」

と、無愛想に良い、直ぐに黙り込んでしまった。つまらん。

「では、本題に入らしてもらいつ。何故私がこの学園に入れたのかと言つと。自分でも分からんんだ。気がついたらあの森に居て、鬼達の標的にされてしまった。……そして、鬼を全て倒した時に、あそこに居るヒットマンに見つかり、連れてこられた」

「ふむ……気がついたら……の。まさか魔法世界ムンドウマギクスから来たのかな?」

「いや。私が気を失う前に居た所は紛れも無い日本だ。だが、今私が居る日本と、私が居た日本では、何がが違う。それに、魔法世界ムンドウマギクス何て物は存在していなかつた」

俺の言葉に、少しばかりしわを寄せるぬらりひょん。

「では、どうやつてあそこに居た鬼を倒したんじゃ?」

「魔術を用いて戦った。私の持つ固有能力みたいなものだがな

「……そうか。なら、それを少し見させてくれんかの？」

俺は頷くと、直ぐに手を翳し。

「
投影開始
トレイスオン

投影を開始する。そして、俺が投影した物は。

「ふお！？そ、それは！」

「知っているのか？これは干将・莫耶。私がもつとも愛用している
夫婦剣だ」

「……何故それを君が？」

「だからさつき言つただろ。私の固有能力と。私の能力は、一度見
た剣等の類は、全て創れる。だからこれも偽者だ。だが、能力は少
し劣るが、本物とさほど変わらない」

ねらいひょんはかなり驚いた顔をして俺を見ている。

「やうか。では、君は異世界人の線が強くなつたの」

「異世界人？もしかして、この世界が平行世界とでも言いたいのかね？」

「まあ、やうなるじや やうな」

まあ、知つてゐるんだがな。さて、ここからだ。まあ、食いついて来い。お前は魚だ、俺と言つ強い力を持った餌を食らいに来た魚。

お前は絶対この学園に俺を置いておき、悪魔や妖等を倒す手助けをしてもらいたいと思つてゐるはずだ。まあ、食いつけ。

「やうじやー君、しばらぐーの学園に働いてみんかの？」

「フイイイイイイイイイイシユウウウウウー！」

「…………ふむ。その話、まんざり嘘でもないかもしれないからな。暫くの間なら、貴様に雇われてやるのも悪くは無いな。……報酬は出るんだやうな？」

「当たり前じや、良い値を出すやつ」

「そうか。では、私は何処に住めば良い？流石に野宿ではキツイの
でね」

「それは安心しなさい。教員住宅が確かに一室ばかり空いていた筈じ
や。少しの間じやが、そこで生活しなさい。それと、君の仕事なん
じやが、この学園で教師をしてもらいたいんじやが。構わんかの？」

「了解した。こちとら衣食住と仕事を『』えたもうつた身だ、贅沢は
言つまい。それに、何か裏があるのだろう？」

「まあ……の。それと同時に、学園の警備も頼みたいんじやが」

「構わん。だが、その教師の仕事と警備の仕事の報酬は、別々でく
れないとね？」

「良いじやう。交渉成立じや。では、今地図を持つてくるのでな。
少し待つてくれ。それと、まだ君の名前を聞いてないのじやが」

「そうだった、まだ俺の名前教えてなかつた。」

「榎本当麻だ。それと、仕事の時はアーチャーと呼んで欲しい」

「分かった。わしは近衛近右衛門^{じゅうえもん}、そりぢや、当麻君、君、お見合いする気は無いいかの? もしあるのなら、ひのきの孫なんてぢりじや?」

「へへ。遠慮をしないつよ」

「俺がそつまつと、ぬりじひよんせがふつぶつまことながり、違う部屋へと消えていった。」

「これから仲間だね、榎本先生?」

「あつははは。まだ先生じゃない俺に先生を着けるか。君は変わつてるんだな」

「…………へえ、それが貴方の素か。私としては、そつまの喋り方より、そつまの方が好ましいよ」

「そつまかい。だけど、あの口調は交渉と戦闘の時にしか使わないか

「安心してくれ……えっと……」

「龍宮だ。龍宮真名。これから宜しく、榎本先生」

「ああ、宜しくな、龍宮」

「うして、俺は龍宮と仲良くなりました。」

それからひりひよんを待ち、地図を受け取り、教員住宅に移動し、直ぐに床に着いた。

「どうも、主人公の榎本当麻です。んで、今回は何で俺を呼んだんだ？」

「どうも、作者のH//ヤです

「何となくだ、気にする事は無い。強いて言つなら、初の感想が届きました！」

「マジか！？」

s a k i e n様、こんな書き始めたばかりの初心者作者の小説に感想を書いていただき、誠にありがとうございます。これからも更新頑張っていくんで、応援お願ひします。

「ありがとーなー！応援宜しくー。」

では、また次回でお会いしまじょー、H//ヤロカヒ

「榎本当麻ですた。またなー」

早起きな二文の雑記？ただ暇なだけじゃん（前書き）

更新遅れました。すいません。

何とか書き終わりました。

最近は学際準備で忙しいので、更新が難しいです。まあ、そんな時期に書き始めた私も私ですがね。

では。本編をどうぞ。

早起きな三文の徳？ただ暇なだけじゃん

朝、俺は目が覚めてしまったのでベッドから起きる。

昨日は行き成り力を使つたからな、自分の力を調べられなかつた。

「トレースオン
同調開始」

身長	168cm
体重	60kg
魔術回路	70本正常
リンクバー	ランクEX正常
アヴァロン	正常稼働

…………ん？ リンカー コア？ 何でリンカー コアがあるんだ？ つか、俺デバイス持つてないし、投影では絶対作れないし……謎だ……。

まあ、良いか。考えててもしようがない。つか、喉渴いた……あ、そうだった。俺吸血鬼だった。すっかり忘れていた。まあ、血吸わなくて生きていけるし、トマトジュースで何とかなるな。

それよりも、魔術回路が70本つて、ありすぎだろう！？ 士郎でも

「んなに無いぞ！？」

そして極め付けがアヴァロンねアヴァロン。不老不死だし、再生能力もあるし、そしてアヴァロンの能力で更に再生するつて……それ、超速再生じゃね？

「……ふむ、さて、飯でも食つか」

俺は立ち上がり、キッチンの方に向かつ。昨日、教員住宅に向かつ途中、コンビニに寄つておにぎりを買っておいた。

それにも、今何時だ？

「……まだ朝の五時か……早いな。予定の時間にはまだ全然か……」

おにぎりの封を切り、そのまま口に運ぶ。

…………さて、どうしたものか…………。

このままでは俺は必ず敵に潰される。先ずは戦い方から学んで行かないといけないな。一応相手の動きや技をコピーできる魔眼がある

が、あれは俺の記憶にはリンクしていない。

よつて、俺は戦い方に関しては典で素人、と言つ訳だ。どつするか、エヴァに頼んで修行をつけて貰おうかな？

ナギの情報をやり、授業料として俺の血を上げる……でも、吸血鬼が吸血鬼の血を吸つても何ともなのかな？

まあ、不死だし、大丈夫だ。なんくるないさー。^{モーマンタイ}無問題つと。ああ、早くエヴァに会いたい……茶々丸にも会いたい……。

……俺つて変態みたいな事言つてるな。まあ、気にしないが。

「さて、飯も食つたし。少し外に出て力の制御でもするか

俺は、刀を片付け、外に出る。

「ん~……はあ。さて、やりますか……結界張つてつと

一応一払いの結界と修復の術を施しておいた。これで遠慮なくやれる。

「先ずは……」

パチン！

俺は指を鳴らす。

— — — — — $T_1 T_2 T_3 T_4 T_5 T_6 T_7 T_8 T_9 T_{10} T_{11} T_{12} T_{13} T_{14} T_{15} T_{16}$

ゲート オブ ピロン
王の財宝を開き、無数の宝具を飛ばす。……すげえ、これが王の財宝の力……これはスクナやフェイト戦に使うか。圧倒的過ぎる。

「次は、アイ・ギス・イルギス・バルホルス、
クム・オフスクライティオレガト・テンペススアスナリス。
闇を従え、吹雪け、常夜の氷雪、闇の吹雪！」

「んじゃ、今度は。アイ・ギス・イルギス・バルホルス、
契約に従ト・ショーンボライ」
オン

「いい。我に従え、炎の霸王来れ净化の炎燃え盛る大剣ほとばしれよソードル・カイ・ティオン・ハ・エペラム・ハ・マルト・トウスムを焼きし火と硫黄罪ありし者を死の塵に、燃える天空」

「ぼおおおおおお！」

「うつしゃ！ 成功！ えつと、これで今俺が使える属性が、闇と氷と炎……まだ使つてないのは雷と風と光か……ま、後で良いか。」

「次は……いや、もう良いかな。学校行く前に魔力消費しまくつたらあれだし。止めるか」

「そうだ、麻帆良学園を歩こう。」

俺は腕時計を見る。まあ、魔術と魔法二つだから、まだそんなに時間が経っていない……暇だ。約一時間、何をして潰そう。

「そうと考へれば即実行だ。俺はそのまま学園の中に行ける様に、投影でスーツを作る。念入りにな。授業中に効果が切れで裸になりたくないからな。」

「そして俺はそのスーツを着て、必要な物を持ち、教員住宅を出る。」

「ひやあああああ。生で見ると更にゾクカイな。こりや感動物だわ……「んづこ」

一人で納得しながらまだ誰も居ない麻帆良を歩いている。さながら観光気分ですぜ。

それにもしても、今は時期的に何処何だ？ネギはもう居るのか。それともまだ来てないのか……どちらにせよ、ネギより先にエヴァに修行を付けて貰わねば。

闇の魔法マギア・エレベアは……まあ、一応やり方は分かつてゐるんだが。暴走しないか怖くて怖くて。ある大抵エヴァに戦い方を教わつてからやるうと思つ。

はあ、修学旅行行きたいな。早くフェイトと戦いてえー！……まあ、今の俺では一捻りにされるだろうがな。

修行頑張ろう。だから、なんとしてもエヴァを説得しなければ！そ.udan、もし2・Aの副担になれたら、挨拶しに行くついでに言ってみよう。

まあ、なればの話なんだがな。

「そつれにしても。静かだな。これが後一時間したら人で溢れかえ
るなんて創造出来ないわ」

このゆつたりとした時間が流れるの、良いねえ。俺こういうの大
好きよ。お、そうだ。世界樹の方にはまだ行ってなかつたな。行つ
てみよう。

俺は小走りで世界樹に向かつた。

古菲サイド

「ふつ！ほつ！はつ！」

今日も良い天氣ネ。こんな時はやはり修行に限るワ。

「ふつ！はつ！はあああ！」

私は一通り型を確認シ、何処が駄目ナノか見つけル。そんな時。

パチパチパチパチ。

何処からか拍手が聞こえてキタ。

当麻サイド

俺は今、世界樹に来ている。大きな木が一本あり、何とも言えない
貴祿を放っているのが分かる。その近くで、俺はある人物を見つける。

「ふつー！ほつー！はつー！」

「あれは……古菲か……。それにしても、中国拳法か……少し悪い
が、覚えさせてもらつた。魔眼発動」

俺は直ぐに魔眼を発動し、少しだが、古菲の動きを見る……よし、
少しばかりだが、覚えたぞ。後で使ってみるか。

そしてそこで古菲の動きが止まつたので、思わず拍手をしてしまつ。

古菲が一いちいちを向く。

「君、誰アルカ？」ここらでは見ない顔アル

「ああ、俺は榎本当麻。今日から麻帆良の教師として働くこととなつた者だ。宜しく頼む」

「そつだたアルカ。私は古菲ネ。宜しくアルヨ」

「古……菲……。名前からして君は中国人か？」

「そうネ。私は中国から来たネ。強い男を求めて」

「なるほど。君は強い人と戦いたいのか。でも、君は女の子何だから、余り無茶はいかんぞ？」

「俺の言葉に、少しだけムツとする古菲。

「勝負に男も女も関係ないアル。それは明らかに侵害ネ」

「これはすまん。気分を害してしまつたか。それは俺の言葉足らはずだ。花嫁前の体何だから、余り無茶をするなと言つただけで。誰も戦うなとは言つていない。勝負に男も女も子供も関係ない。戦いとは、己との戦い。自分より強い敵と戦い、それに勝てた時の喜びは計り知れない。己が鍛え上げた技、拳、足……己が超えなければならぬ壁を越えるには、強い者と戦う事もまた然り。安心したまえ、

俺は差別なんでものはしない

「…………初めてネ。男の人にそう言われたのハ

「へえ、 ううなのか。ま、頑張りたまえ。俺は影ながら応援させて
もらひつよ。古菲」

そう言つて俺は背を向けて、世界樹を後にする。

古菲サイド

初めは馬鹿にされたのかと思つたけど、それはさうやら私の感違い
だたネ。この男、中々分かつてゐる。それに、少しばかりあの男か
らは普通じゃない空気が感じられタ。一度、手合わせ願いたいアル。

私はあの男、当麻が去つてから、また型を確認する。

今日は、何で良い日ネ。これは今日一日楽しみアル。

当麻サイド

「今は7時か……まだ時間あるよ。暇だな……もつまどと云いたい所は見たし。やる」と無くなつちまつた。暇だあ……」

でも、生で古菲見れたから良いか。そして、次は何処をまつつき歩こうかな。予定まだまだ30分あるし。

「…………しようがない、少し早いが、行くかな」

俺は麻帆良学園を手描し、歩き出した。

「ぬ～ら～り～ひょ～ん。来てやつたぜ～」

「……………」

……………

反応無しか……だつたら。

「俺の最高の必殺技でこの学園諸共「す、すまん! 入つてきて良いぞ! だから止めとくれ!」……ちつ……失礼する」

俺はドアを開け、学園長室に入る。

「今打うちせんかったかの？」

「何の事やりサッパリです」

「…………ま、まあ良いじゃろう。それより、予定の時間よりも早いのじやが、どうした?」

「いや、暇だから早く来た。別に早く来ても良いだろ。予定に早く来て悪い事は無いんだからよ」

「まあやじやが……いや、止やつ。前に句を言つても聞かぬそつじやし」

「あら、それは侵害だな。俺はちゃんと事聞くぜ。」

「んで。俺は何処のクラスの教師になるんだ?」

「まあやつ荒てるでない。君こは2-Aの副担任になつて欲しいんじや」

「副担任って誰の？」

「まだ担任の先生は来てないんで。一応この部屋に寄るよには連絡してある。それと、今日の夜10時に世界樹の広場に来とくれ。君の実力を確かめたいと、魔法先生皆の要望じや」

「めんどくせえ。俺の実力ならこの学園に居る魔法使い程度なら瞬殺だよ。それで、相手は誰なんだ？」

「その相手なんじやが……」

その時。

「ンンン。

「失礼します」

「おお、高畠先生。やっと来たかの」

「やつとつて。私は一応時間通りに来たんですけどね」

そつ言いながら苦笑するタカミチ。おお、渋いねえ。

「おや、君は？」

「紹介しよう。昨日この麻帆良にやつて来た」

「榎本当麻だ。宜しく頼む。えつと……」

「タカミチだ。タカミチ・ト・高畠。気軽にタカミチで良いよ」

「そうか。だつたら俺も当麻で良いぜタカミチ」

タカミチが手を差し出してきたので、俺はタカミチの手を握り、握手する。

「それで、当麻君には高畠先生のクラスの副担任をやつてもらいたい。そして、今夜戦う相手は……」

「タカミチって事か」

俺はタカミチを見ながら、少し引きつった笑みを浮かべる。勝てねえ……どうするよおい。魔法使つか? それともランクⅡの宝具を投影して物量と質量で攻めるか……どちらにせよ、今の俺では固有結界出さないと勝てねえ……。〇ーＺ

「ははは、お手柔らかに頼むよ。当麻君」

いや、お手柔らかに頼みたいのはこっちだつつの。たく、とんだ戦闘狂バトル・ジャンキーだこいつは。でも、本当にマジでどないしよう……タカミチの戦い方は分かつてゐるが……拳のスピードを捕らえられるかが問題だな。

居合いの類だけど、明らかに剣の速さを越していいる。居合い拳だけか? それに、咸封法アルテマ・アート……確か究極技法だっけか。気と魔力を合成して、肉体強化・加速強化・物理防御・魔法防御・耐熱・耐寒e t c。

えつと、一言だけ言いたい。……それ、何でチート?

まあ、良いか。何とかなる。幸い。さつき古菲の中国拳法を「コピー」したし、もしそれが駄目でも。タカミチの動き、技を「コピー」すれば良いか。

「了解した。地獄に落ちろ、ぬらりひょん」

俺は最後の方は小声で言つてやつた。多分聞こえていないはずだ、
多分…………。

早起きは二文の徳？ただ暇なだけじゃん（後書き）

いつも、作者のH//ヤと。

「主人公の当麻だ。それで、今回も俺を呼んだ理由は？」

「感想を返してもうおうかと思つて。

「また感想来たのかよー？」の方々は優しいな

だなー、そんな事より、感想返してくれ。

「ああ、だな。 貢殿遮那様、感想ありがとうございます。 まあ、
それは作者の頑張り次第ですね。 もしかしたら失踪とかもありえま
すから」

縁起でも無い事を言つた。 私はこれでも頑張つてゐる……筈だ。

「心配になつてきた。 まあ、今回の感想はこれだけなので。 また次
回、お会いしましょう。 まあ、感想が来たらの話ですがね。 それで
は、また今度」

教師つて疲れるな。戦闘はっこです。……（前書き）

お久しぶりです。作者のHIMIYAです。

すいませんでした！学祭が終わり次第更新しようと思つてはいたのですが、期末テストの事をすっかり忘れていたので、急遽勉強に切り替わりました。

本当に申し訳ありませんでした！

それでは、本編をお楽しみください。

教師つて疲れるな。戦闘は楽しいです……

「 いじりちだ、当麻君」

俺は今、タカミチの後ろに着いて行き、2・Aのクラスを目指している。

さてと、どうしましょう。魔力は一応抑えてるから、一般人と然程変わらないが。氣は無理だつた。あれは魔力と違い、外側の力ではなく、内側の力だったので、抑えられない。

俺の氣は、刹那や楓、古菲の更に上を行くからな。

まあ、刹那は問題ではない。龍宮が話しているだろう。同じ部屋だし。後は……問題無いかな。エヴァは怪しむだろうが、古菲みたいに一般人が弛まない努力をして力を手に入れた程度にしか思わないかもしれないしな。

お、考え事していたら着いた様だ。

「それじゃあ行こうか。当麻先生」

当麻先生……か。本当、タカミチは教師の鑑だな。ちゃんとプライベートと仕事の切り替えが出来ている。憧れるねえ。

俺はタカミチの後に続き、教室に入つて行つた。

わわわわーわやつーわやつーあはははははー

騒がしいー……どんだけ元気なんだよここからは。俺が中学生の頃は、こんなに無駄に元気じやなかつたぞ。つづか、しらふでこれとか。こいつらに酒入つたらどんだけやかましいんだ?

ああ、修学旅行で酒入つてたな。あれは酷い事件だつたね。等とボケていつる暇じやないな。

「はー、静かにしてくれないかな?これからHRを始めるから、落ち着こいうか」

シ――――――ン。

すげえ、あんなにうるさかつたのに、一瞬で静かになつた……あ、明日菜だ。恋する乙女の田だねえ。本当、オジコンだな。

「先ず、今日からこのクラスの副担任になつた榎本当麻先生だ。当
麻先生、自己紹介」

「あ、ああ。えつと、始めまして。今日からこのクラスの副担任になりました榎本当麻です。主に教えるのは世界史と数学かな。それと、タカミチ先生が忙しい時には、たまに英語も教えるから。宜しくお願いします」

ここで一礼。

Γ Γ Γ Γ Γ

あれ？俺もしかしてスベッた？でも、普通に挨拶しただけだよ？本當だよ？

「…………か」

か？かめはめ波か？

... -- $T_1 T_2 T_3 T_4 T_5 T_6 T_7 T_8 T_9 T_{10} T_{11} T_{12} T_{13} T_{14} T_{15} T_{16} T_{17} T_{18} T_{19} T_{20}$

そつと云いながら、皆は俺の所に集まつて来る。

「何処から来たんですか？」

「年はいくつですか？」

「彼女とか居ます？」

く。これはこれは、怒涛の質問攻めだな。どう切り抜けよう。俺はここからの勢いに蹴落とされかけた。だが。

バン！

「いい加減になさい……榎本先生が困っているではありませんか！
！はい、皆せん席に戻つてください」

いいんぢょの言葉に、皆は自分の席に戻る。

「あ、ありがとうございます。えっと……」

「雪広あやかですわ。榎本先生」

「雪広さん、ありがとうございます。俺では対処仕切れなかつた。感謝する」

「いえいえ。委員長とこには当然の事です」

やつ語つて、おほほほと笑うここんちよ。この子も元気だな。

つか、俺の何処がカッコいいんだろつか？前世では一回ももてた事も無いのに、不思議だ。

まあ、良いか。めんべくせいし、考えるのは予想。

「えつと、それでは。HRを始めます」

それから俺はちやんと仕事をこなし、夕方まで働きましたとや。

「ふう、教師は本当に疲れる職業だな。に、してもだ。今日エヴァの席見たけど、居なかつたな。あやつめ、サボりおつたな。後で挨拶し行つちやる」

俺はぶつぶつ言いながら外を歩いている。これって完全に危ない人だよな俺。自重自重っと。

「つうか俺、相坂さよ見えてたよ。お化け見えてたよ。あいつも何か手振つてたから皆が見てない所で手振り返しちまつたよ。何か泣きそうな笑顔で俺を見てたよ。可愛かっただぜちきしょあおおおお

「何を叫んでいるんだい？ 榎本先生」

「おおうー? な、何だ、龍宮か。驚かすなよ!」

俺の後ろにいつの間にか立っていたよ。やべ、完全に痛い子つて思われた。

「本当、貴方は面白い人だな」

「それは褒めてるのかな？それとも貶しているのかな？」

「ああ、七八日前だと思こます?」

あはは、完全に俺遊ばれてるよね。完全に遊ばれてるよね？大事な事だから一回言いました。

「それで、君から話し掛けてくるって事は、何か俺に用でもあるのかな？」

「察しが良いですね。これから2・Aに来てください。面白い事がありますよ」

そう言つて龍宮は歩き出す。仕方がないので俺は龍宮を追つ。

「2・Aで一体何をやるんだ？」

「それは着いてからのお楽しみさ」

そう言つて少しばかり不適な笑みを浮かべるたつみー、おお怖い怖い。俺、帰つても良いかな？

「所で、いつの間にそんな俺と親しくなつた訳？」

「昨日の時頃で、じゃないですか？」

「おーおー、まだ一冊も経ってないのか?」

「昨日から同じ仲間ですから、別に良いじゃないですか」

「まあ、じつとしては早めに友人とか作りたかったけどよお

「なら、良いじゃないですか」

「口上と笑つて再び前を見て歩き出すたつみー。何か流された感があるんだが、そこら辺どうよ?等と考えていたら、もう2・Aのクラスの前に来てしまつたというwwwちよwwwテラ早すwww結構距離あつたのに直ぐ着くとかwww

「ああ、入つてください、榎本先生?」

「へへ、君には似合つてないな、その口調は。自然体で良いぞ?」

「……ふふ、なら、そつとさせて貰おうかな。当麻先生」

……何だろ?。漫画で読んでた時の龍宮と、今の龍宮では、感じが全然違う。何故だろ?。

あ、そうだ。教室入らないと。俺はドアを開け、教室に入る。

パンパンパンパンパンパン！！

「…………」当麻先生…………

「…………」

今自分の顔を鏡で見れば、速攻爆笑出来る顔になってるだろうな。

「これはこれは。一本取られた。まさか赴任した日にいきなりこんなサプライズがあるとは、思いもよらなかつたよ」

そう、素直な感想を述べ。俺は暫しこの楽しい歓迎会を堪能した。

に、してもだ。五月の作った飯うめえ！！前世でも食つたことの無

い上手さだぜ！！

（ヤオバオズ）

今度超包子行こうっと。

後、朝倉にインタビューされ、いいんちよこにはお近づきの印に銅像を貰つた。実際いらないと思つたが、結構立派に出来てたので貰つておく事にした。

あ、それかい。ザジと少しお話出来たよ。

「Juncha」

「

「そんな端に居ないで、もつと前に行つたら？」

「……」が子供だったり

はー！ しゅーりょーう！ ！

うん！俺としては凄い満足だね！！でも、ザジが魔法関係者と知った時は、発狂するかと思つたぜ。でも、語尾のぽによは萌えたので良しとする！－

そして今現在。俺はエヴァちゃんの家の前に立つて いる。何故かつて
？勿論 o h a n a s h i ! もとい、お話をしに来たんだよ。
決してなのはのお話（砲撃）では無いので、悪しからず。

ピンポン。

とつまチャイムを押す。

「はい、どう様でしょつか？」

「ここにちは。俺は今田2・Aのクラスの副担任になつた榎本当麻です。えっと、茶々丸さんですね？一応エヴァさんに挨拶に来たのですが」

「マスターなら奥に居ますので。どうお上がりください」

「それじゃあ。失礼しますね」

俺は茶々丸の言葉に甘え、中に入る事にした。

「ん？誰だそいつは」

茶々丸に着いて行くと、エヴァちゃんがお茶を飲んでくつろいでいた。この野郎、授業でやがれよ。

「ここにちは。エヴァンジェリンさん。俺は今日2・Aのクラスに副担任としてやって来た榎本当麻です。それとも、こう呼んだ方が

良かつたですか？『闇の福音』さん？』

ダークエヴァンジェル

「…………まつ。じじいが平行世界から来た奴が副担になるとは聞いていたが……もしや貴様嘘をついていたのか？」

「いや。平行世界から来たのは本当さ。それに、何故君の正体を知つているのかは、企業秘密といつ事で」

「ふん！それで、わざわざ私の家にまで来たんだ。よもや、ただ挨拶に来ただけではないだろ？」

「さつすが、良く分かってるね。お願いがあつて来たんだ。それと、耳寄りな情報も着いてくるぞ？」

「耳寄りな情報？じゃあ先ず、その耳寄りな情報とやらを聞かせてもらおうか？もしつまらん情報だつたら、貴様の血を一滴も残らず吸つてやるつ」

「おお、怖い怖い。でも、ヒヴァーさんに血を吸われるのも悪くは無いかもしけん。でも、全部は吸われたくないな。」

「はい、そのまえに疑問があります。真祖の吸血鬼が同じ真祖の吸

血鬼の血を飲む事は可能なんでしょうかエヴァ先生…

「誰が先生だ！別に何とも無いが……私自身も良く分からん。吸つた事もないし……つて、まさか貴様」

「察しの通りだ。俺も吸血鬼さ。真祖のな。エヴァの仲間に当たるのかな？ほら、キバあるつしょ？」

俺は口を開き、歯を見せる。

「……………そ、うか。貴様も同類という事か。それでは、血を幾ら吸つた所で、死ぬ事は無いのか」

うつは、まさかの殺す気まんまん…やつべえ、真祖じやなかつたらガチで殺されてたな俺。

「んじゃあ。情報提供と行きますか。サウザンドマスターの噂は知つてるか？」

「ああ、知つている。奴は死んだ。皆口々にそつ語つてているしな。全く、私にこんな惡々しい呪いを掛けおつて……それがどうした」

「そのサウザンドマスターが生きてこないと云つたら……死ひやするへ。」

ガタツ！

エヴァちゃんが勢い良く立ち上がる。

「ありえん！奴は死んだ！行方も分かつていい！何故貴様がそんな事を言える！！！」

「落ち着けよエヴァ。これはガセネタじゃない。来年、サウザンドマスターの息子。ネギ・スプリングフィールドがこの学校に修行をしにやって来る。そいつが持っている杖は、サウザンドマスター、ネギ・スプリングフィールドが使っていた杖だ」

「…………それは…………本当か？」

「何だつたら。学園長に聞いてみれば？ネギをこの学園に修行をさせる事は、裏での妖怪が手引きしてゐる事だし」

「そりが…………ふつ…………ふふふ…………はははははははははははは…………！殺しても死なん馬鹿だとは思つてはいたが…………はあ、それで、お前が頼みたい事とは何だ？」

「俺が頼みたいのは……修行を付けてもらいたい」

「私に修行を？何故だ？」

「一応言つとくが。俺にも魔力が存在する。今は抑えているがな。だけど、幾ら量が膨大でも、使い方を知らなければただの宝の持ち腐れだ。だから力の使い方、そして戦い方を教わりたい。正直言つて、俺個人のスキルだけではちとキツイ戦いも起こるかもしれない。だから頼む！」

「……私は悪の魔法使いだぞ？そんな私に魔法を教わりたいなど

「悪の魔法使い？んなもん関係ねえよ。つうかその前に、誰が正義の魔法使いに俺は習いたいって言つた？悪の魔法使いもだ。俺はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという一人の人間に頼んでいるんだ」

「この言葉に、エヴァちゃんは固まる……。

「……はつはつはつはつはつ！吸血鬼である私を人間と言つか。面白……気に入った。良いだろう。我が同胞よ。ただし、途中で逃げる事はするなよ」

「モチのロノロソンですよ。ありがとなエヴァ」

「礼などこりん。それじゃあ、授業料として、血は頂くからな?」

「へいへーい。それじゃあ、俺はこれで失礼するよ。んじゃな」

「ああ。修行をしたかつたらこいつでも来い。毎日来てくれても構わんぞ?」

「了解。あ、そうだ。今日の夜。タカミチと戦う事になつてゐるから。見に来たかつたら来いよ。エヴァちゃん。今日の授業も歓迎会も来なかつたし、流石にこれは来るよな?」

「ああ。お前の今の戦力を知つておきたいしな。行かせてもらひつよ」

「そうか。今度こそ、それじゃあな」

俺はエヴァちゃんの家を後にした。

それから「コンビニ」で弁当を買い、教員住宅に戻り、飯をかつ込み時間を持つ。

それから時間が来たので、世界樹の広場に移動する。

「ふおふおふお。来たかの、当麻君」

「こんばんみーっす。で? こんな大勢の前で戦えと?」

「何じや。緊張じとるのか?」

「まあ、それもありますけどね。それで、タカラニチは?」

「もうやれりに立つて、準備万端じや」

学園長が指差す方向を見ると、タバコを加えながら一コギとしている戦闘狂が立つておられました。

「当麻君の方は、準備は良いかの?」

「…………投影、開始」

力チャ。

俺は干将・莫耶を投影し、タカミチの所に行く。
至る所で、転送系の魔法か！？何て言つてたが、気にしない方向で
行く。

「準備出来たぞ？」

「分かった……それでは……」

「宜しく頼みよ。当麻君

「お手柔らかに」

「……始め……」

最初に前に出たのが俺。タカミチの居合い拳は中距離系の攻撃。だ
つたら最初から相手の土俵なんかに立つてないで、自分の土俵で戦
つたほうが良い。

だけど、移動中にはささやタカミチは攻撃を仕掛けてくる。

キンー！

「ぐつー。」

「これを受けたか……見えてるのかい？」

「！」
「冗談を……勘だよんなもん。おらあー。」

ボツボツボツボツー！

空気を切る音が聞こえる。俺はそれにあわせ、双剣で受け流す。

キンーキンーキンーバキ！

「ガツーー。」

一発受けきれず、顔面にヒットしてしまつ。危うく意識が飛びそうになつた。だけど……。

「これならーー。」

俺は後ろに下がり、干将・莫耶を投げる。

「何のつもりだい？こんな物」

「ブローカンファンタズム
壊れた幻想！」

ドカン！！

干将・莫耶が爆発する。
よし、次だ。

「トレースオン
投影開始……タカミチ……本気だしてないだろ？」

煙で何も見えないが、タカミチの気配は今だ近在。気を失つてはないだろう。

「気づいていたのかい？」

「当たり前だ。そんな様子見みたいな感じで攻撃さちやあ、気づかない奴は居ない。……次の一撃は本気を出さないとやばいぞ。 I am the bone of my sword 『我が骨子は捻れ狂う』」

俺は偽・螺旋剣をいつでも射る用意をする。一応手加減はしている。
死にはしない。

「どうやらその様だね。左手に「魔力」……右手に「氣」……合成

「……………
偽・螺旋剣！！」

俺の弓と、タカミチの超居合い拳。つうか咸卦法の状態で殴つくる。何か物凄い極太レーザーみたいなんだが。

そして、俺の放つた偽・螺旋剣とタカミチの超居合い拳がぶつかり
合い、大きな爆発を生み、煙が再び立ち込める。

俺はその瞬間を狙い、気配を消し、タカミチに近づき。干将・莫耶を投影し、タカミチの喉元に突きつける。

「わあ。 いい事だ？」

「…………参りました」

ついして、タカミチとの試合。俺の勝つといつもド終わつを告げた。

教師つて疲れるな。戦闘は楽しこです。……（後書き）

「こんばんは、HIIヤです。感想を返しますね。

大根好き様、感想ありがとひじれこます。

まあ、そう思われても仕方ないですね。初心者だとか、そんな安易な言葉を使って逃げるつもりもありませんし。言い訳をするつもりもありません。

不快な気持ちにさせたのであれば謝ります。すみませんでした。
あれから少し自分の小説を読み返しましたが、結構ありえない所もありました。まあ、そんな事言つと。自分の小説を、自分で否定してくるかもしれません。

タイトルにつきましては……ネーミングセンスのかけらもありませんね。

本当に申し訳ありませんでした。

次に、靈劍荒鷹様。感想ありがとひじれこます。
まあ、似てしまこますね（苦笑）。

でも、まだ書き始めたばかりなので、自分でも展開が決まってないし、どういう風に書けば良いのか分かっていない点もあるので、何とも言えませんね。

面白いって思われるようになりますので、頑張っていきますので、宜しくお願ひします。

えつと、次回は……出来るだけ早く上げます。

では、今回はこれにて失敬です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2777m/>

ネギま！転生だと！？うっしゃあああああ！

2010年10月14日23時08分発行